

地球の子ども通信
Children's Communication on Earth

CCE だより

2019年4月 ~ 2020年8月 まとめ号



第52回国際交流事業 鳴子の子ども達との運動会より
楽しかったパン食い競争

CCE だより

～2019年4月～2020年8月 まとめ号発行に寄せて～

地球の子ども通信
会長 芳賀 節子

地球の子ども通信会員の皆さまにおかれましては、終息しないコロナ感染と、厳しい残暑の中、いかがお過ごしでしょうか？

平素、地球の子ども通信活動に際しましては、多大なるご支援、ご協力を賜り心から感謝申し上げます。皆さまの、子ども達の未来への活動に対し深いご理解のもと、2019年度事業も素晴らしい実績を残すことができました。

様々な活動、行事の中でも特に印象的でしたのは、第52回地球の子ども通信国際交流事業「被災地訪問から学ぶこと、共に助け合うこと、未来に活かすこと Part II」ーインドネシアの子ども達と共にーでした。

11日間の交流プログラムを通して見えたインドネシアの子ども達は、日本の生活文化をしっかりと学ぼうとする意欲的な姿でした。そこからは、マエサファンデーションの会長、ボビーウイボウ氏の教育観、未来を担うインドネシアの中学生達への、力強いメッセージを感じることが出来ました。

ホストファミリーとの交流も、和やかで楽しいものでした。充実した、交流事業となりましたことをご報告いたします。

もう一つ、素晴らしい出来事をお知らせいたします。
地球の子ども通信に、青年部が発足致しました。現在6名のメンバーで構成されています。小、中学生時代にCCEのホームステイプログラムに参加して来ました子ども達です。高校生、大学生、社会人で構成されています。

この青年部は、2018年に行った第51回地球の子ども通信国際交流事業「ラオスの子ども達による仙台ホームステイプログラム」の際に結成されました。2018年度、2019年度事業と2回にわたり活動してまいりました。若者達の元気な力と一緒に、CCEの事業が、未来に向かって育めるのは嬉しいことです。

コロナ感染拡大により、予定しておりました、第53回地球の子ども通信国際交流事業「日本の子ども達によるラオスホームステイプログラム」も延期になっております。

これまでの、交流国の子ども達もコロナという共通の問題を抱えながら学校生活を送っています。多くの子ども達がラインで授業が行われている状況です。それぞれ、共通の悩みを抱えながらも、連絡を取り合い情報交換を行いながら、メールやビデオ交流を深めているCCEです。

コロナ感染が終息に向かい、また以前の様に、子ども達とそこに関わる多くの人々の再会と新しい出会い、更なる子ども達の交流が広がる様願っております。未来に向かって。

最後になりましたが、コロナ禍のもと、2020年度地球の子ども通信総会が、例年の様に開催出来ませんでした。また、CCEだよりの発行が大変遅れましたこと、心よりお詫び申し上げます。

これからも会員皆さまのご支援、ご指導を賜り、活動を継続して参りたいと役員一同願っております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

《2020 年度事業計画》

・ 総会と役員会の予定

令和2年度総会	年一回六月
理事会	毎月一回
青年部理事会	毎月一回
その他 緊急理事会	随時

その他の活動計画

* 行事計画

- 9月 CCE まつり
- 12月 CCE チャリティイベント
- 1月 CCE 新年会
- 2月 CCE 勉強会

* チャリティバザー計画

・ 野菜、果物バザー

春 玉ねぎ 竹の子 甘夏みかん

夏 トマト なす ピーマン じゃがいも きゅうり オクラ 枝豆 桃

秋 ぶどう りんご さつまいも

冬 ほうれん草 大根 かぶ アスパラ菜 チンゲン菜

・ 花バザー 4, 5月、10月

・ 豆腐バザー 4月～6月、9月～3月

・ 米バザー 毎月

・ その他 餃子バザー など

上記の様に活動を計画しておりますが、状況により変更になる場合があります。

第 53 回国際交流事業「日本の子ども達によるラオスホームステイプログラム」 延期について

地球の子ども通信では、ラオス派遣事業を、2020年3月25日～4月5日の日程で計画しておりましたが、世界的な新型コロナウイルス感染拡大に伴い、延期となりました。

この事業は、ラオスユースユニオン(ラオス外務省青年部会)との継続交流事業として計画、これまで5回、ラオスの子ども達の招へい事業で交流を育んできました。今回は、初めての日本の子ども達によるラオスホームステイ派遣プログラム予定でした。ラオス在住で CCE ラオス支部のブンヘン・スティチャック理事がラオス側のコーディネーターとして、計画を進めてきました。

双方で事業開始を待つばかりに準備が整っていただけに、延期は大変残念な結果となりました。中止ではなく延期とし、状況が整い次第事業を行いたいと考えています。ラオス側のブンヘン氏も、この交流事業がいつでも実現できる様に具体的に準備を進めていると語っていました。

*ラオスについての研修会は、ラオスからの留学生 Mr. SAVATHDY Phanmany 氏 (東京工業大学修士課程)を迎えて行いました。

パンマニーさんは、仙台高等専門学校在学中から CCE の活動に参加協力し、現在もラオスと CCE の子ども達との交流事業に尽力して下さっています。

研修会では、「ラオスに行ったら日本では出来ない体験をして欲しい。」と話していました。



ラオスについての研修会

第52回地球の子ども通信国際交流事業
「被災地訪問から学ぶこと、共に助け合うこと、未来に活かすこと Part II」
ーインドネシアの子ども達と共にー

令和1年6月28日(金)から7月8日(月)の日程で、
インドネシアの子ども達との交流事業が無事終了致しました。
報告書の一部を抜粋しご報告致します。お楽しみ下さい。

第52回地球の子ども通信国際交流事業

The 52nd CCE International Exchange Project

「被災地訪問から学ぶこと、共に助け合うこと、未来に活かすこと Part II」

“Visit to Disaster-struck Area: Lessons Learned, Helping One Another, Living Our Future Part II”

ーインドネシアの子ども達と共にー

With Indonesian students

事業報告書

28 June, 2019 ~8 July, 2019

主催 : 地球の子ども通信 (CCE)
Organizer : Children's Communication on Earth

後援 : 駐日インドネシア共和国大使館

Supporters

宮城県
仙台市
宮城県教育委員会
仙台市教育委員会
(公財)宮城県国際化協会
(公財)仙台観光国際協会
鳴子国際交流協会

 NHK 仙台

 河北新報社
朝日新聞仙台総局

TBC 東北放送

Embassy of the Republic of Indonesia in Japan

Miyagi Prefecture
Sendai City
Miyagi Education Committee
Sendai City Education Committee
Miyagi International Association
Sendai Tourism, Convention and International Association
Naruko International Association

Japan Broadcasting Corporation Sendai Station
Kahoku Press
Asahi Press Sendai Branch Office
Tohoku Broadcasting Corporation

助成 : (公財)未来の東北博覧会記念国際交流基金

Financial supporter

Tohoku Exposition Memorial

International Exchange Fund

協賛 : 株式会社マリネピア

Sponsorship

Marinepia Co., Ltd.

第52回地球の子ども通信国際交流事業「被災地訪問から学ぶこと、共に助け合うこと、未来に活かすこと Part II」ーインドネシアの子ども達と共にー

事業報告書 成果より

地球の子ども通信(CCE)会長 芳賀節子

第52回地球の子ども通信国際交流事業は、「被災地訪問から学ぶこと、共に助け合うこと、未来に活かすこと Part II ーインドネシアの子ども達と共にー」をテーマに実施。日本と同じ地震国インドネシアの子ども達と共に、被災地を訪問し現地の人々から被災体験や復興の様子を聞き、共に学ぶ機会として計画した。

第52回国際交流事業は、インドネシア MAESA 財団からの派遣中学生14名、引率者2名参加。Madiun 市、Ponorogo 市、Mejayan 市、3市400人の応募者の中から選ばれた。学校成績ではなく、将来に向けてどのような夢を持っているか、その夢をどのような努力をし実現させたいかが重要な選考基準となった。

今回参加した MAESA 財団代表者の Mr.Bobby 氏は、2001 年中学生の際に CCE ホームステイプログラムに参加した。様々な価値観に出会い、世界観が広がった体験をもとに、多くのインドネシアの子ども達にその機会を作りたいと、MAESA 財団を設立した。

被災地訪問(気仙沼市東日本大震災遺構伝承館、南三陸町、石巻市震災遺構旧石巻市立大川小学校、松島)では、語り部の説明を聞き、映像や写真を見ながら、被災当時の状況を学んだ。又、松島の勉強会では海の中の被害についても知ることができた。

インドネシアの子ども達は、宮城県だけでも約11,000人の命が失われたことなど、甚大な被害に大変驚いていた。被災後、自然災害を想定した訓練、備えをすること、津波が起こった時には高い所に避難することなど、災害時の教訓として現在行われている取り組みと対策を学んだ。又、日本では、携帯電話やスマートフォンを使って災害を伝えるシステムがあることにも、関心を寄せていた。東日本大震災の際には、多くの国々からの支援があったことも知った。更に、復興の様子を通して、悲しい出来事から諦めずに立ち上がり、復興に向けて頑張る力や、困難な状況でも秩序を守り、お互いに励まし協力し合う、日本人の災害に対する向き合い方に自分達もそうありたいと話していた中学生達だった。

陸の上だけではなく海の中も甚大な被害に遭い、津波によって流されてしまった甘藻(魚の産卵場所として大切な海藻)を元通りにするのに8年かかったことを知った。地球規模で課題となっている環境問題であるが、災害により破壊された自然を、元に戻すことの大切さなど、私達が共に生きる地球の環境を守ることについて、自分達の問題として捉え考えるきっかけもなった。

被災地訪問は、命の尊さ、国を越えて助け合うことの大切さ、自然災害からどのように命を守るかの多くの知識を得た。

11日間の日程は、宮城県知事表敬訪問や学校訪問、鳴子川渡の子ども達との交流会（運動会、文化紹介）、施設見学（仙台市松森工場、仙台市科学館、仙台市天文台、トヨタ自動車東日本大衡工場）、様々な日本文化体験など、大変充実した内容となった。

学校訪問は、学校法人朴沢学園明成高等学校と仙台市立旭丘小学校を訪問。お互いに違う文化を受け入れながら自然な交流が育まれた。明成高等学校介護福祉科の授業体験では、インドネシアの中学生が障害を持つ人の立場になることの大切さを、目の見えない人の白杖体験を通して学んだ。どの国でも、ノーマライゼーションの在り方を取り入れた福祉制度ができることを、未来につなげたいと願った授業となった。

鳴子川渡の子ども達との交流会では、運動会を行った。運動会は、インドネシアの子ども達にとって初めての体験となったが、大いに盛り上がった。

仙台市松森工場見学では、国を問わず私達の生活の中にあるゴミ処理、環境問題について学んだ。トヨタ自動車東日本株式会社宮城大衡工場は、CCE交流事業で初めての訪問となった。ファクトリーオートメーション化された自動車製造過程を見学。インドネシアの子ども達は、興味深く観察していた。ロボット化が進んでいる整然とした工場内でも、その管理や細部の作業、最終検査は人の力によって行われていることを知り、人間の想像力、創造力について更に考えさせられた。

ホームステイ期間中の滞在体験を通してインドネシアの子ども達は、実に積極的に学んだ。そこからは、インドネシアの次世代を担う、力強いエネルギーを見ることができた。MAESA 財団の、この交流事業、事前研修会を通して、日本から学ぶべきことを身に付けてきての、今回の事業参加だということに気づかされた。

インドネシアの子ども達は、日本人の生活の在り方、人間性についても深く洞察していた。日本人のマナーの良さ、挨拶をきちんとすること、時間やルールを守る真面目さ、勤勉さなど。学んだことをインドネシアに戻り将来に役立てたいとも熱く話していた。インドネシアの子ども達の意欲を持って学ぶ姿は、私達も学ばなければと思うほどだった。

18年前に出会った一人のインドネシア中学生による CCE 国際交流事業体験が、今回の展開へと広がった。参加した両国の子ども達の未来につながると期待された素晴らしい、充実した事業となった。これを第52回国際交流事業の成果としたい。

The 52nd CCE International Exchange Project
“Learning from visiting the disaster area, to help each other, making use of it for the future- Part II” – With children of Indonesia -

Achievements

President of CCE Setsuko Haga(Mrs.)

The 52nd CCE International Exchange Project have implemented under theme of 「”Learning from visiting the disaster area, to help each other, making use of it for the future- Part II” – With children of Indonesia -」. The project has been planned to visit the disaster area with children of Indonesia, to hear and learn experience of those disaster days and process of reconstruction until today, from local people who lived in the disaster area.

14 Junior high school students and 2 conductors from MAESA Foundation joined The 52nd International Exchange Project. Those students are selected from 400 applicants from Madiun city, Ponorogo city, and Mejayan city, not by school record, but by what dream do they have, and how do they make effort to achieve their dreams.

Mr. Bobby, Chairman of MAESA Foundation, who participated this 52nd project, had joined CCE homestay program when he was in junior high school in 2001. Through this experience, he found various sense of values and realized that his view of the world widened. To give opportunity of such experience to children of Indonesia, he decided to set up MAESA Foundation.

During visiting disaster area, Ruins of the Great East Japan Earthquake Kesenuma city Memorial Museum, Minamisanriku area, Ishinomaki City Okawa Elementary School, Matsushima, they heard about situation of damage from anecdotist and learned from photos and videos of the disaster days. They also learned about damage inside the sea through study in Matsushima.

Children from Indonesia surprised to hear that there was severe damage - about 11,000 people died even only in Miyagi. They also learned about actions and measures against disaster which are made from study of the disaster. For example, training and preparation assuming natural disaster, and evacuation plan to high place when Tsunami disaster happens.

They also showed interest in disaster information transmission system using cellphone or smartphone. They noticed that there were so many supports from many countries when the Great East Japan Earthquake occurred. Through knowing process of recover, students noticed and felt that they also would like to have such mind of readiness, and behaviors of Japanese people, such as – attitude of people that positively stood up from sorrowful event, energy and power of people for recovery, polite attitude to keep order even in difficulty, and attitude of encouraging each other.

They come to know that not only on land, but also marine resources had great damage, and it took 8 years to recover Eelgrass(Seaweed, fish spawning place) after elimination of it by Tsunami.

It became good opportunity to raise Environmental issue as their own problem, by knowing Nature destroyed by disaster, and knowing importance and difficulty to recover, and how we can keep environment of Earth, where we live together.

Students gained a lot of knowledge about preciousness of the life, importance of helping each other across the country, and how to save our lives from Natural disasters.

Through 11 days, they have experienced substantial schedule such as courtesy call to Miyagi Prefectural Governor, visit School, exchange meeting with children of Narukokawatabi(Athletics meeting, introduction of culture), facility tour(Sendai City Matsumori Waste Incineration Plant, Sendai City Science Museum, Sendai Astronomical Observatory, Toyota Motor East Japan Inc, Miyagi Ohira plant), and have had various experiences of Japanese culture.

Students visited Hozawa Gakuen Meisei High School, and Sendai City Asahi Elementary School. With more they know different culture, they gradually communicated naturally. During class experience of Care Welfare Department of Meisei High School, Junior high school students studied importance of having handicapped experience of disabilities, through experience of using white walking stick which blind people have. Through those experience, we felt and hope that welfare system considering normalization will be enacted to all countries in the world.

At exchange meeting with children of Narukokawatabi, students enjoyed Athletics meeting. Even though it was their first experience for Indonesian children to join Athletics meeting, they fully enjoyed. At Sendai City Matsumori Waste Incineration Plant, they studied about waste treatment and environmental issue, which related to our dairy life.

It was first visit for CCE Exchange Project to visit Toyota Motor East Japan Ink, Miyagi Ohira plant. They had a factory tour of automobile manufacturing line, which is automated factory. Children of Indonesia looking at those line in fascination. They come to know that even at automated factory, process control and detailed work, final check were done by human, and made them think about importance of creativity and imagination of human.

Through those experience during homestay, Children of Indonesia studied positively. From those attitudes, we realized powerful energy of the children, who will bear the next generation of Indonesia.

We see that children of Indonesia deeply penetrating lifestyle and humanity of Japanese people. They mentioned enthusiastically that they would like to remember good manner of Japanese people, polite greetings, accuracy of keeping time and rule, and mental of being diligent. And mentioned that they hope to utilize these experiences in the future, after they returned to Indonesia. We felt that we must learn from those positive attitudes from the students.

The experience of CEE International exchange project 18 years before led this wonderful project. It was a small experience of one Junior high school boy. And now, it became wonderful and substantial project which contribute to future of both children of Indonesia and Japan. These are the achievements of the 52nd CCE International Exchange Project.

ウェルカムパーティスピーチより



地球の子ども通信 (CCE) 会長 芳賀節子

皆様、こんばんは。
本日は、地球の子ども通信第52回 国際交流事業「被災地から学ぶこと、共に助け合うこと、未来に活かすことPart2 インドネシアの子ども達と共に」のウェルカムパーティによくそお越し下さいました。心から感謝申し上げます。

インドネシアからこの度の事業に参加して下さいました、Maesa財団会長 Mr.Bobby Wibowo 氏 に対し、心からの歓迎を申し上げます。今回の事業は、Wibowo 氏にとりましては、二度目の継続事業となります。共に、再び子ども達の交流を深められます事を光栄に思います。

引率者の Mrs. Anik Primawati 氏、そしてインドネシア三都市、400 人の応募の中から選ばれてきました生徒の皆様、ようこそ宮城県仙台市にいらっしゃいました。皆様を、ホストファミリーとして受け入れる事が出来、大変嬉しく思っております。

地球の子ども通信は、この地球上にたくさんの友達を作ること、未来の子ども達のための国際交流を育むことを目的に 1992 年に設立しました。主にアジアの国々、シンガポール、インドネシア、カンボジア、香港、ラオスとの交流事業を 27 年間行って参りました。

皆さんの国インドネシアとの正式な交流事業は、1995 年から始まりました。皆さんはまだ生まれていませんね。Mr.Bobby Wibowo 氏と初めてお会いしたのは 2000 年、彼が中学一年生か、二年生だったと思います。

Mr. Bobby Wibowo 氏は、CCE のホームステイプログラムに参加したことで、様々な価値観に出会い、世界観が広がったと話して下さいました。そして、もっと多くのインドネシアの子ども達のために手を差し伸べ、自らが影響を受け学んだように、多くの子ども達に機会を与えたいとも、語って下さいました。素晴らしいインドネシアの国の発展のためにと。この彼の理念が、今回の Maesa 財団の企画となり、CCE との継続事業につながったのではないのでしょうか？

CCE 発足から現在に至るまで、このホームステイ事業に実際に参加しました交流国の子ども達は 710 名になりました。そこに関わって共に活動した子ども達を加えた数は、約 3000 人となるでしょう。

この地球に、約 75 億の人々が住んでいると言われていています。CCE のプログラムで出会った私達は、とても奇跡的な出会いをしていると思います。私が、このプログラムを通して誇りに思います事は、出会ったホストファミリーとゲストである子ども達の交流が、とても長く、深く継続していることです。

インドネシアの生徒の皆さんは、今回、観光旅行とは違った様々な体験ができると思います。多くの異文化発見と共通発見をして学んで下さい。

そして私達は、違いを超えて素敵なお友達になりましょう。この地球に住む人として、大好きな友人として。

最後になりましたが、この度の事業を行うにあたり、駐日インドネシア共和国大使館、宮城県、仙台市、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、宮城県国際化協会、仙台観光国際協会、鳴子国際交流協会にご支援、ご指導を頂きましたことを、心から感謝申し上げます。並びに、助成を賜りました未来の東北博覧会記念国際交流基金に対し、深く感謝を申し上げる次第です。そして、多くの皆様のお力添えに、心からお礼申し上げます。有難うございました。ご挨拶と致します。

Welcome party speech

*Mrs. Setsuko Haga
President of CCE*

Good evening Ladies and Gentlemen, welcome to party of “Learning from the affected area, Helping each other, Making use of it in the future. Part 2, with children of Indonesia”. This welcome party was organized as 52nd International Exchange Project of Children’s Communication on Earth. I’d like to thank you from bottom of my heart to attending this party.

Firstly, we welcome Mr. Bobby Wibowo, Chairman of Maesa Foundation, who attended to this project from Indonesia. This is his second time and continuing project, and it is our honor to deepen relationship with children from Indonesia again.

And we also welcome Mrs. Anik Primawati, leader of this tour. And of course, students, welcome to Sendai, Miyagi prefecture. You were selected from 400 applicants from 3 cities of Indonesia and we are so happy to have your visit as host family.

Our organization, Children’s Communication on Earth, is founded in 1992, and our aim is to make many friends on the earth and enhance International exchange between children. We continued this exchange program for 27 years, mainly with Asian countries, such as Singapore, Indonesia, Cambodia, Hong Kong, and Laos.

We started this project with your country, Indonesia on 1995, before all of you students are not born yet. It was 2000, when I first met Mr. Bobby Wibowo. He was a student, 1st or 2nd grade of junior high school.

After he joined homestay program of CCE, he talked to me that throughout this program, he met people with various value and widen his worldview. And he also said that he would like to give chance to many children in Indonesia and let them experience what he had affected and studied on this program. I believe his belief of contribute to development of Indonesia leads to this project, and continuance to this program with CCE.

Number of children who joined this homestay program become 710, since founding of CCE until now. And it would be more than 3,000 peoples helped and related to this program.

It is said that more than 7.5 billion of peoples are living on this earth. And I think it is a kind of miraculous encounter to meet in this program. One of the things which I am very proud of, is that relationship between host family and children are deep and continuing long time.

I believe that you, all students from Indonesia would have many experiences, much more than ordinary sightseeing journey. And I expect you all watch and study different culture in Japan, what is different and what is same.

And with understanding such difference, let’s be a good friend. As a person who live on this earth, and as a best friend.

Finally, I would like to thank “Embassy of the Republic of Indonesia in Japan”, “Miyagi Prefecture”, “Sendai City”, “Miyagi Prefecture Board of Education”, “Sendai City Board of Education”, “Miyagi International Association”, “Sendai Tourism, Convention and International association”, Naruko International Association, and many peoples for their help and advice. I give all people my deepest gratitude and thanks.

体験を通して学んだ交流事業 まとめより -大切な人とのつながり-



マエサ財団会長 ボビー ウィボウオ

今回のホームステイプログラムは僕にとって三度目の参加です。最初に参加したのは2001年で、その2回目は2015年で、そして3回目は今回、2019年です。子供たちの年齢に合ったとても素晴らしいプログラムです。子供たちが様々な観点から学ぶことが出来て、興味深く参加しております。僕にとってもとても魅力的なプログラムです。

今回の訪問から数多くの教訓を学ぶことが出来ました。今回天文台や科学館を見学して、子供たちにとって、とてもいい体験だと思います。日本ではこのような科学館や天文台を通して小さい頃から子供達に様々な学問を楽しく体験させています。僕は、インドネシアにこのような科学館や天文台があればインドネシアの子供たちに良い影響を与え、子供たちの知識を増やす情報源となると思いました。インドネシアでこのような博物館を建てたいと思う、とてもいい刺激となりました。

旭丘小学校と明成高校への学校訪問もとても印象的でした。日本の子供たちは小さい頃から全て一人でできるように習慣づけられており、学校生活の中でも昼食の時間になったら、子供達が自ら給食の準備をしています。明成高校では介護の授業に参加して、僕とインドネシアの子供達はとても感動しました。インドネシアの子供達にとっても良い体験で、彼らが将来社会に出るときにきっと役に立つものだと思います。学校訪問の時に私たちは目が不自由な人について学びました。学校の先生が教えてくれたのは、障害者は自分たちが持っている障害のために何も出来ないわけではなく、彼らが五体満足の私たちよりもただ少し出来る事が限られているだけということです。その授業で聞いた先生の話から子供達もより深く障害者を理解することが出来たと思います。

日本とインドネシアの文化交流を通して、子供達が良い体験を得ることが出来ました。川渡を訪問して、私たちはその地域の大人の皆さんと子供達に暖かく歓迎され、言葉が違っていても両国の子供達がとても楽しく一緒に時間を過ごしました。交流会が終わって、私たちが帰ろうとしたときに、一人のお母さんと二人のお子さんが私のところに来てくれて、お土産と折紙をくれました。そして、彼女は一所懸命英語でそのお土産はインドネシアの子供達に差し上げたいと説明をしてくれました。それを聞いて、私はとても感動して、思わず目に涙を浮かべました。感謝の気持ちでいっぱいです。バスに乗る前に私はもう一度皆さんに「ありがとうございます」を伝えました。

そして、今回のホームステイプログラムのテーマに沿って、私たちは日本で起きた地震と津波について学び、その被害を伝える博物館を見学しました。とても印象に残ったのは宮城県庁の表敬訪問をしたときの成田様の説明を聞いた時でした。宮城県の行政の優れた対策で被災地を再構築し、新しい技術を導入し、地震や津波が起こった時に携帯電話を通して警告を発信する事はとても素晴らしいです。

今回の国際交流で私たちはとても素晴らしい体験をしました。特に、人と人とのつながりについて学びました。これはとても大切なものだと思います。この国際交流事業もこの人と人との交流から行われました。今回頂いた機会は、私たちにとって素晴らしいものであり、ここで学び、体験してきたものを自国に戻った時にぜひ活かしたいと思います。子供達も今回の交流と体験を通して大きく成長でき、彼らの将来に役に立つものだと思います。そして、10年、20年後に彼らが自分の夢を手に入れて、またこの交流を続けてくれるだろうと期待しております。

The exchange program which learned through experience
–A precious human relations –

Mr. Bobby Wibowo
Chairman of Maesa Foundation

This 2019 homestay trip is my third one, first one was in 2001 and the second one was in 2015. Wonderful was a well curated program for teenager. It allowed them to learn about various thing from different point of views. Even for an adult my age, I still found it very interesting.

There was a lot of interesting lessons that we could get from this trip. We visited astronomy and science museum. In Japan, kids are brought to museums since young age, hence introducing the habit of “educational but fun” activities. This has inspired me, why can’t we start this habit in Indonesia? We need to start building museums to facilitate and broaden Indonesian’ kids’ knowledge!

School visits to Asahigaoka Elementary Schools and Meisei High School were also pleasant. In Asahigaoka We can see that independency is taught since young at school. For instance, elementary students take turn to serve food at the cafeteria. In Meisei HS, students learn about first aid, which was a very good life skills to have in an emergency situation in public settings or workplaces. That day we also learnt from one of the teachers about disability. Being disabled does not mean that they cannot do anything, they just unable to do slightly less that we “normal” people can do.

During our visit to Kawatabi, we met with the local children who gave us a very warm welcome. We learnt that language is not a barrier to show genuineness. Moments prior to our departure from Wakatabi, one of the ladies from the area came to me with her two kids bearing gifts and an origami. With her limited English she said that the gifts was for our kids (from Madiun). I shed a tear, this is what a real kindness looks like. Arigato, I said, before I boarded the bus.

In harmony with CCE 52th International Exchange Project theme about learning earthquakes and tsunami, we visited earthquake museum. The work of Miyagi local government to recover the area post-tsunami really amazed me. They used high-tech tsunami warning system that can be accessed through android. Mrs. Narita, Miyagi governor staff, was very kind to show us around

There were too many beautiful moments that we could learn from this cultural exchange trip, and the best part was their polite way and attitude to connect with us. Hence with this spirit, we feel the obligation to apply and spread the culture back in our country. We also hope that in ten or twenty years to come, this experience may bring our kids into a better future, aiding them to reach their dreams.

第 52 回地球の子ども通信国際交流事業 ＜事業報告書完成＞

11 日間の交流の様子やインドネシアの子ども達の声がたくさん詰まった本になりました。

ご希望の方は、事務局までご連絡下さい。
3,500 円/1 冊(132 ページ)

第 52 回地球の子ども通信国際交流事業
The 52nd CCE International Exchange Project
「被災地訪問から学ぶこと、共に助け合うこと、未来に活かすこと Part II」
"Visit to Disaster-struck Area: Lessons Learned, Helping One Another, Living Our Future Part II"
—インドネシアの子ども達と共に—
With Indonesian students



仙台市青葉区一番町にて

地球の子ども通信 (CCE)
Children's Communication on Earth

新理事紹介

芳賀邦子さん(仙台在住 箏曲教授)

この歳で何ができるのだろうかと考えています。箏演奏を始めとして、自分のできるところで何か子ども達の交流のお役に立つことがあれば、協力していきたいと思っています。

阿部恵美子さん

この度、新理事という大役を引き受けすることになりました南三陸の阿部恵美子です。職業は農家で果樹、お米、畜産の経営しています。地域では農産物直売所の運営や女性グループで遊休農地の活用で豆を作り加工品を作る活動をしています。微力ではありますがよろしくお願ひ致します。

CCE 地球の子ども通信さんとは付き合いは 20 年ほどにもなると思います！南三陸の野菜や果物を皆さんの所へお届けしておりました。これからも美味しい果物、野菜を作り皆さんに食べて頂きたいと思っています。

《青年部発足とこれまでの活動》

CCE 青年部は2018年、第51回国際交流事業「ラオスの子ども達による仙台ホームステイプログラム」をきっかけに結成されました。

主なメンバーは、2010年、第29回国際交流事業「日本の子ども達による香港ホームステイプログラム」に参加した、当時小学生、中学生、引率の大学生です。6名が青年部理事として、地球の子ども通信を担っています。

これまでの青年部の主な役割として参画してきた行事は、第51回地球の子ども通信国際交流事業「ラオスの子ども達による仙台ホームステイプログラム」第52回地球の子ども通信国際交流事業「被災地訪問から学ぶこと、ともに助け合うこと、未来に生かすこと Part II」です。その他、バザー、コンサート 又は、東北大学留学生との交流会、勉強会など積極的に活動しております。

第51回事業では、ラオスの子ども達と鳴子川渡の小学生によるオリエンテーリング(川渡の町発見)を行い、楽しい時間を過ごすことができました。

また、第52回事業では、継続交流として、鳴子川渡においてインドネシアの中学生と川渡の小学生による運動会を企画し、行いました。インドネシア、川渡の子どもたち混合のチームを作り競い合いました。スキンシップもはかりながらの競技は応援も熱が入り、大変盛り上がりました。

ホームステイプログラムから学んだ、国や文化の違いを超えて友達になれるという、自らの体験を実践できたように思いました。様々な国に友達を作ること、それは、未来を共に考えていくことに繋がっているのだと思います。

これからも青年部は、人との出会いとつながりを大切にして、この経験を未来に繋げたいと考えています。誰でも参加できます。皆さんも是非一緒に！

《青年部役員紹介》

青年部部长 菅原良(33才)

初めまして。私は仙台在住社会人8年生、山形の美術系の大学を卒業後、現在は仙台で働きながらCCEの活動に参加している菅原良と申します。2018年に結成されたCCE青年部初代部長を務めさせていただいております。最近ハマっているのは庭いじりとスムージー作りです。

私とCCEの出会いは2000年、私が中学二年生の時に、インドネシアへのホームステイプログラムに参加したのがきっかけでした。

それ以来約20年間、時にはソーラン節を踊ったり、国際交流イベントのブースのお手伝い、今ではホームステイプログラムの一部に青年部として企画から携わらせていただいております。

今年は昨年からのコロナの影響もあり公私ともに異常な事態が続いており、逆に今までの日常の大切さが身に染みしています。この困難を乗り越え、新しい平和な日常を築けるように、そしてCCEでの活動を通して国際交流の輪を広げるために協力していきたいと思っております。

広報部長 今野耕嗣(23才)

現在私は電気通信大学(2年)にて情報工学関連の勉強をしています。昨今の時世により、授業はすべてオンラインで行う日々です。落ち着くまでは仕方ないことではありますが、乗り切るまで頑張りたいと思います。

CCEの活動では訪問・招聘事業ともに様々な事業に参加させていただきましたが、その中でも最初にホームステイでシンガポールを訪問したことを今でもよく思い出します。当時小学4年生だった私は、ホストファミリーの子と一緒に丸々1週間現地での学校生活を体験させていただき、日本のそれとは違う様式はとても印象に残っています。

私が今勉強している分野では、特に今後海外の方々との連携を密にとっていく必要が多いため、CCEにて幼少の頃のこういった海外の文化を知る機会があったことは、とても糧になるであろうと感じております。

未だ海外渡航が容易にできない状況ですが、いずれまた再び様々な国々の人と交流ができることを信じ、これからもCCEの活動に協力していきたいです。

編集部長 村上千紗都(20才)

宮城大学食産業学群3年の村上千紗都です。2020年7月現在、新型コロナウイルスの影響で、大学の授業はすべて自宅からのオンラインになっています。

趣味は、ファゴットという木管楽器の演奏です。今年のCCEまつりでは演奏する機会をいただき、歌とオーボエ、ピアノの4人で演奏会を行いました。選曲や進行、衣装や練習場所などメンバーと何度も相談しながら準備を進めました。初めてのことばかりで不安でしたが、メンバーや家族、会場の手配や司会をしてくださった理事の方々のおかげで演奏会を成功させることができました。様々な出会いと繋がりでできたこの演奏会は貴重な経験となりました。

ファゴットは中学生から始め、現在は市民吹奏楽団で活動しています。今年は4月の定期演奏会と、全国大会を目標にしていたコンクールが中止になり、代わりに家族と過ごす時間が増えました。現在は祖父母の介護や家事など、いままでできなかったことに積極的に取り組んでいます。

小学生からCCEの活動に参加し、ホームステイやホストファミリーの経験から国や言葉が違っていても友だちになれることを知りました。大学生でより一層CCEに関わり、一つ一つの行動が信頼を生み、その信頼の積み重ねで人との関係が成り立つと感じました。CCEで学んだことはこのような人と人の繋がり大切さです。これからも様々な場面で信頼関係を築いていきたいと思っています。

企画イベント部長 原直也(22才)

CCE ホームステイ国際交流事業に4回参加。

- ・2007年第23回国際交流事業「日本の中学生、小学生によるシンガポールホームステイプログラム」
- ・2008年第25回国際交流事業「日本の小学生による香港8日間ホームステイプログラム」
- ・2010年第29回国際交流事業「日本の小学生による香港10日間ホームステイプログラム」
- ・2010年第30回国際交流事業「日本の小学生によるシンガポール9日間ホームステイプログラム」

企画イベント部 鈴木風子(21才)

日本大学法学部法律学科3年。

幼少期の頃から家族がホストファミリーとなり数多くのアジアの子供と交流を持ってきた。2010年小学5年生で初めて香港へホームステイ。続いて2013年2016年とシンガポールホームステイを経験。初めてのホームステイ滞在時に指を怪我し香港の病院に入院するという貴重な体験をし帰国。国籍関わらず人の温かみにふれ、以来、CCEの活動に積極的に参加。現在は東京にて社会保障法児童福祉を勉強中。

企画イベント部 今野清杜(15才)

仙台駅近くの学校に通う、15才で高校1年生の今野清杜です。趣味は小説作りと読書で、夢は小説家です。

初めて2月にコロナウイルスのニュースを見たときは、どうせ日本にはこないだろう、またそんな大事にはならないだろうと思っていました。しかし卒業式まで残り1週間を控えた夜に、コロナウイルス対策のために安倍総理から、全国の小中高に来週からの休校要請を連絡したというニュースが流れ、そのときからコロナの印象が変わり、私の中学卒業が早まりました。同級生との別れも早まったことや卒業式に親に来てもらうことが出来なかったことなどがありました。思わぬ別れだったのでとても悲しかったです。でも高校では、最近週5回登校ができるようになって、友達も出来るようになりました。コロナ騒ぎが落ち着いてきたので、これからもCCEのお手伝いを頑張ります。

ホームステイプログラム後の交流風景

カンボジアからジムさん親子、香港からティモシー君一家が来仙しました

2019年4月上旬、カンボジアからジム・ソピアープさんとお母さん(4月5日～8日)、香港からティモシー君とご両親(4月4日～4月9日)が、同時期に芳賀会長宅を訪れました。

ジム・ソピアープさんと芳賀会長ご夫妻との交流は、ジムさんが東北大学留学生だった頃に始まりました。ジムさんが勉学を終え帰国してからは、会長ご夫妻がカンボジアのジムさん宅を訪問するなど、深い信頼関係のもと長きにわたり交流が続いておりました。

ジムさんは、留学生時代から CCE の交流事業に関わって下さり、カンボジアへ帰国後、カンボジアの子ども達との交流事業の橋渡しを下さっています。設立 10 周年記念事業「地球の子ども通信国際子ども会議 in Miyagi」を初めこれまで 3 回、カンボジアの子ども達の招聘事業の際に引率として参加。現在は CCE 理事でもあります。

ジムさんは、以前から「学生時代を過ごした日本、仙台に一度お母さんを連れて行きたい。」とおっしゃっていました。今回、その思いを叶え、芳賀会長ご夫妻との再会が実現しました。

ティモシー君は、SIS(シンガポールインターナショナルスクールイン香港)在学中(小学3年生)、第 31 回国際交流事業「香港の子ども達による仙台ホームステイプログラム」に参加、芳賀会長宅にホームステイしました。事業後も芳賀会長とティモシー君、そしてご両親との交流が続き、これまで 3 度来仙しています。

桜の季節に来仙した皆さんを、仙台市太白区の三神峯公園、白石川堤一目千本桜、船岡城址公園、福島県二本松霞ヶ城公園など、桜の名所に案内しました。満開とはいきませんでした。5分咲きほどの桜を見物、皆さん大変喜んでいました。

ジムさん親子、ティモシー君親子は、芳賀会長の教育理念を深く信頼し CCE 交流事業を応援して下さい。このような関係が、国を越えた子ども達の交流を支える大切な力になっています。

香港から Jones Hiromi (奥村) さんが、来仙

奥村さんは、娘さん 2 人がシンガポールインターナショナルスクールイン香港の子ども達による仙台ホームステイ事業に参加したご縁で、東日本大震災後、娘さんのホストファミリーのお見舞いに来仙。その後も数度仙台を訪れ、CCE 理事達との交流を図っています。

今回は、2019年8月 22 日～23 日に鳴子温泉や仙台市博物館を案内し、それぞれの近況報告を話しながら交流を深めました。奥村さんは、香港へ帰国後、留学中の娘さんのケンブリッジ大学卒業式に出席するため、イギリスへ向かうと話していました。

CCE の子ども達の交流事業を通して、大人もまた新しい出会いが生まれ、継続して交流が育めることは嬉しいことです。

CCE 新年会 & カンボジア料理講習会

2020年1月4日(土)、「CCE 新年会」と「カンボジア料理講習会」を芳賀会長宅にて行いました。会長、理事2名、青年部理事4名が参加し、留学生のサカール・モロコットさんが、カンボジア料理を紹介して下さいました。メニューは、「カレーそうめん」。

まず、鶏手羽元を使ったココナッツミルク入りカレーを作りました。次に、ソーメン上のにせる具材を準備。割いた蒸し鶏、千切りキャベツ、細切りきゅうり、生もやし、ベビーリーフ、スリムネギなど。料理完成後、モロコットさんに食べ方を教えてもらい、茹でたそうめん好きな具材をトッピングし、その上にかレーをかけて食べました。とても美味しくて大きい鍋のカレーがあつという間に無くなりました。

デザートは、お返しに日本の食文化“団子”を紹介。モロコットさんは、くるみ団子を食べるのは初めての様子でした。

又、モロコットさんは、「自分の国の文化を紹介することは、国際交流のきっかけになります。相手の国の文化を知ることとはとても大切です。」と、自らの体験から青年部の若者たちに話して下さいました。青年部の皆さんは「カレーライスなら作れるかな。」「小学生で香港ホームステイに参加した時、お好み焼きを作って喜ばれました。」と話していました。お腹も心も満たされた新年会となりました。

＝訃報のお知らせ＝

CCE 会員の月井 優志(ユージェイ・チャンドラ)さん、稲毛萌莉さんご兄妹のお母様が、68歳で死去されました。

月井優志さんが東北大学留学生時代にCCEと出会ったことをきっかけに、彼の出身地である、インドネシア、マデウン市のサントユスフ中学校との交流事業を、1994年から始める架け橋を作ってくれました。

その交流事業を始めるにあたり、お母様には、大変お世話になりました。インドネシア視察の際にはホームステイをさせて頂き、インドネシアの生活文化や、歴史や多くの文化の違いをご指導して頂きました。

何よりも、日本の子ども達、私達を深く愛して下さいました。そのご尽力が、今も日本とインドネシアの子ども達との友情交流を育み、心をつないで下さっています。

晩年は、日本で過ごされて、私たちも何度かお会いし、親しくさせて頂きました。

心からご冥福をお祈り致しますと共に、お優しい笑顔を忘れずいたいと思います。

合掌



第28回CCEまつり「五月晴れコンサート」

第28回CCEまつり 「五月晴れコンサート」

♪演奏

声楽 / 野田みのり (宮城学院女子大学学芸学部音楽科声楽専攻二年)
オーボエ / 三澤真由 (宮城学院女子大学学芸学部音楽科オーボエ専攻二年)
ファゴット / 村上千紗都 (宮城大学食産業学部二年)
ピアノ / 横山穂乃花 (宮城学院女子大学学芸学部音楽科ピアノ専攻二年)

♪曲目

アリア バッハのカンタータ BWV187「彼らみな汝を待ち望む」より
/ 声楽とオーボエとファゴット
ヴェネツィアの競艇 ロッシーニの音楽の夜会より / オーボエとファゴットとピアノ
アリア *lascia ch'io pianga* ヘンデルの歌劇「リナルド」から / 声楽



とき 2019.5.19(日) 14:00開演 (13:40開場)
ところ 日立システムズホール仙台・交流ホール
(仙台市青年文化センター)

参加券 大人 2,000円 高校・大学生 1,000円 (飲み物、軽食付)

主催 地球の子ども通信 (CCE) Children's Communication on Earth
問合せ 地球の子ども通信 (CCE) 事務局 Tel.Fax: 022-376-5382 e-mail: nra55237@nifty.com
URL : <http://www.cce-sendai.jp/>



2019年5月19日(日)、総会終了後午後2時より日立システムズホール仙台・交流ホールにて「第28回CCEまつり」を開催しました。参加者は約50名。

今回は、大学生4名の出演による声楽と楽器演奏のコンサートを行いました。出演者は、CCE青年部理事の村上千紗都さん(ファゴット)と、小学生でシンガポールホームステイ事業に参加した経験のある野田みのりさん(声楽)、そしてその友達の三澤真由さん(オーボエ)と横山穂乃花さん(ピアノ)。観客の前で演奏する初めてのコンサートということで、とても緊張していたと話す4名でした。しかし、精一杯頑張って演奏する姿に、来場者から惜しみない拍手が送られていました。

参加者からは、「生の演奏を聴くことは、やはり楽しい。」「大学生の今後の活躍にエールを送りたい。」との感想が聞かれました。

コンサート終了後、4名の大学生は「演奏会を行う場が無いので、このような場を提供して頂き大変ありがたかった。」「これからの課題が明確になり、益々頑張ろうという意欲につながった。」と、感想を述べていました。

若い演奏家の夢が広がることを願ったコンサートとなりました。

『東北大学国際まつり』参加

2019年5月12日(日)東北大学川内キャンパス萩ホール前広場で行われた国際まつりに、CCEも参加しました。当日は、アジアの子ども達との交流事業活動のパネル展示と、交流コーナーとして折り紙紹介を行いました。CCEの参加者は、会長、理事4名と青年部2名。

他のブースでは、留学生が食文化や伝統舞踊などを紹介し、様々な国の文化に触れる機会となりました。

又、東北大学総長 大野英男氏にお目にかかる機会があり、芳賀会長がCCEの活動を説明、事業報告書を手渡すことができるという、うれしい出来事がありました。



『せんだい地球フェスタ 2019』出展

2019年9月23日(月祝 9:00am~4:00pm)仙台国際センター展示棟にて、せんだい地球フェスタ 2019(主催:せんだい地球フェスタ実行委員会)が行われました。

今回は、71団体(国際交流団体49、ステージ発表5、食品販売ブース17)が出展、来場者は7,500人でした。各団体の活動紹介の他、ステージでは各国の民族舞踊、歌、楽器演奏が披露され、食品販売ブースでは各国の料理が並び、会場は国際色豊かな雰囲気にも包まれて、賑わっていました。

地球の子ども通信は、活動紹介として第52回国際交流事業でのインドネシアの子ども達との交流風景を中心に、これまでのホームステイ交流事業の様子の写真展示と、チャリティバザー(りんご、野菜、雑貨など)を行いました。

当日スタッフは、会長、理事4名に加え、青年部理事の原直也君、村上千紗都さん、今野清杜君が参加し、大いに力を発揮してくれました。

CCEの活動をアピールすることができ、同時に他の団体ブースを見学したり、情報交換することもでき、有意義な機会となりました。

カンボジアの伝統的な布クロマーで布マスクを作りました

地球の子ども通信で、カンボジアの万能布クロマーで、マスクを作りました。使っている皆さんから、柔らかい綿で、とても気持ちがいいと好評です。

一枚500円です。

ご希望の方は、事務局までご連絡下さい。



青年部取材レポート 2020/06/10 南三陸町入谷りんご農家 阿部さん宅訪問

6月10日水曜日、南三陸町の阿部さんのお宅を訪問しました。天気に恵まれ、風が心地よく感じられました。200本以上あるという、りんご畑を案内していただきました。この時期はりんごの1回目の摘果時期で、今は「つがる」の摘果をしているそうです。2回目の摘果は6月末頃にあり、仕上げ摘果と呼ばれます。摘果は実の成長のために必要な過程であり、2回の摘果でりんごの実の半分以上を落とすそうです。

阿部さんのりんご畑では、生食用だけでなく、シードル用の品種など様々な種類のりんごを栽培しています。シードルは香り豊かな「ふじ」と酸味の強い「サワールージュ」をブレンドしていて、さわやかさが魅力です。りんご畑の他には、桃やぶどう、さらに牛舎にも案内していただきました。牛舎では、数日前に産まれた子牛にミルクをあげる体験をさせていただきました。

阿部さんは、25年来 CCE との交流があり、ホームステイに来た海外の子どもたちや、私たちが CCE バザーでお世話になっています。今回見学した畑を通して、阿部さんの作物に対する愛情を感じることができました。
(村上千紗都)



阿部さんのりんご畑



桃畑にて



子牛「あずきちゃん」にミルクをあげました

<理事からの一言>

新型コロナウイルスの世界的流行の日々に、疲れ気味の毎日。アジアの国々の子ども達との交流を行っている地球の子ども通信の願いは、一日も早い事態の収束と自由に海外渡航が出来ること、また元気で子ども達と会えることを切に望んでいます。
(理事 稲村)

第 52 回事業、鳴子運動会における青年部会の話し合いは、活発に意見が出され生き生きと行われていた。みんなで、一つの目標に向かって作り上げていく環境は、若者達の未来を育むための力になると思う。意見を述べ合う機会が少なくなった、若者達にとって。
(理事 木野内)

2020年3月に計画されていた第53回国際交流事業「日本の子ども達によるラオスホームステイプログラム」の延期は、とても残念だった。私もこのプログラムに参加する予定で、これまで我が家にステイしたラオスの子ども達との再会をとても楽しみにしていた。コロナウイルス感染が終息し、実現できることを願っている。
(理事 小林)

コロナ窩の世になって半年、遠くに住む家族や友人と会うのもままならない日々が続いています。10年前の震災で感じた、日常の当たり前が当たり前じゃないということを改めて思います。が、コロナ慣れと言われているように、気がゆるみがちなこの頃、会えない方と必ずまた再会できる、アジアの子どもたちとも又、すてきな交流ができる事を信じて、今できる繋がりを大切に、前をむいてもう一辛抱ですね。
(理事 鈴木桂子)

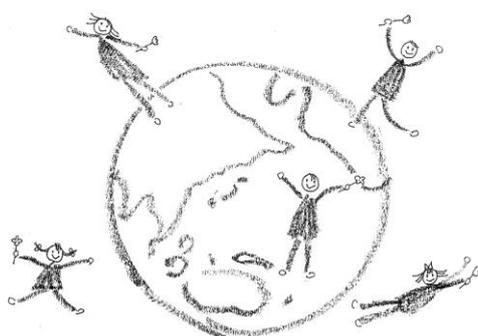
ありがとうの気持ち……。母は90才になりました。長生きしていただき嬉しいのですが、なお元気に生活してくれたら助かります。一度も海外旅行の経験がない母ですが、CCE 事業のホストファミリー体験のお陰で、家に居ながら海外の子ども達や引率の方々との交流することができ、母はとても喜んでいました。
(理事 伊藤浩子)

新型コロナウイルスの世界的な影響で、海外交流事業が延期になってしまいました。ラオス訪問の予定でしたが、このような状況になるとは考えてもみませんでした。

その中で、息子の良は、毎週のように南三陸町の葡萄畑、ワイン醸造所へと出かけ、畑や現場の工事の手伝いをするようになりました。それは、芳賀会長が息子の想いをつなぎ、30年程前から交流のあった南三陸町の阿部さんとのご縁を通して、道筋を作ってくださいましたおかげです。

息子の広い視野、地球の自然環境を守る、未知へのチャレンジ精神は、交流事業に関わっていたことで、培われたことと感じています。海外には出かけられませんが、人と人との交流を大切に育んできた CCE の活動が、少しずつ次の世代に新しい形で育っていくのを感じます。

思いがけない 2020 年になっていますが、このような時代に生きる子どもたちが、新たな生き方を見つけていける後押しが、これからの私の課題だと思っています。
(理事 菅原道子)



発行／地球の子ども通信(CCE)
発行日／2020年8月29日
発行人／芳賀節子
事務局／〒981-3213 仙台市泉区南中山1丁目24-5
Tel Fax : 022-376-5382
E-mail : nra55237@nifty.com
URL : <http://www.cce-sendai.jp/>